## 文化講座「特殊研究講座」一覧

**平成18年度**

5 月27日（土）「絵本と子どもの教育」　東京大学教授　秋田　喜代美氏

10月21日（土）「日本のわらべうたとマザーグース」目白大学教授　鷲津　名津江氏

**平成19年度**

10月27日（土）「ホスピスから学ぶいのちの教育」

めぐみ在宅クリニック院長　小澤　竹俊氏

## 教員学術研究会（平成18年度）要旨

**平成18年6月14日**

**子どもの造形的な表現と理解　―時間による表現の変化とその記録，展示方法の考察―**

非常勤講師　稲　田　大　祐

幼児期の子どもの造形的な表現活動は，絵画や粘土作品など最終的に出来上がったものを保育所，幼稚園の作品展などで展示し，紹介されることが多い。しかし，子どもの表現活動は，最後に残った造形作品に表されているのではなく，表現していく過程の中で，様々に形や色など姿を変えている。依然として最終形の造形物だけが保護者の目に触れ，子どもの表現を把握，判断，理解しようとする傾向があるのではないか。表現における過程の重要性は，初等教育，幼児教育の中で十分語られているにもかかわらず，現状ではその過程を捉え，伝え，紹介するような具体的な造形活動，展示方法の工夫や内容の開発が十分なされていないのではないか。

計画性がまだ身についていない，技術的に未熟な子どもにとって，自分の思いや制作の意図を作品の最終段階に表現することは難しい。更に，作品を仕上げることが目的ではなく，表現活動そのものが楽しみであり，活動それ自体で満足し，特別残るものを求めていない場合もある。

ビデオや写真などの事務的な記録ではなく，子どもの活動の変容を残すような造形的な表現や記録，展示方法を研究することで，本当の意味で表現の過程の意義を示し，子どもの表現活動の理解をより多く深め，更には子ども自身にも，活動内容が残る安心感と活動の軌跡を確かめる利点があるのではないかと考えている。そのために，「時間」経過に応じて変化を記録できるような活動内容や提示方法を，作家の制作方法，ベルクソンなどの時間の考え方をヒントにしながら考えている。

子どもの造形的な表現活動を，最終的に出来上がった「点」として捉えるのではなく，メロディーのように，一定の時間の奥行き，ボリュームのある「線」として理解する必要があるのではないか。